

アメリカ神話の水脈——ピューリタンからネオコンへ

難波雅紀

はじめに

現在のアメリカ合衆国の外交政治は、国際テロとの対決、ユニラテラリズム(unilateralism)、先制攻撃論、軍事力主義、中東民主化論といった用語をもってよく語られる。これらの戦略は、ジョージ・ブッシュ(George Walker Bush, 1946-)大統領と、大統領を取り巻く極端なまでに保守的な政策者集団、いわゆるネオコン(neoconservative)によって産み出されている。また、ブッシュ政治を特徴づけている新保守主義(neoconservatism)は、その本質を指して「純化されたレーガニズム」、「レーガニズムの焼き直し」と評されている。^①この評言は、多くのアメリカ研究に携わる者の見方を代弁する、非常に明快な言説である。レーガニズムとは、第40代大統領ロナルド・レーガン(Ronald Wilson Reagan, 1911-2004)が唱えた、強いアメリカを取り戻すための強硬な外交方針を指すのは言うまでもない。そうなれば、ブッシュ政権の代名詞でさえある新保守主義は、実は決して新しいものではなく、現在の複雑な事態に即応できる斬新な発想でもないとさえ考えられるのである。そのレーガニズム的な外交方針や手法をブッシュ政権が採り続けている現状は、これから論考を始める際にまず重要な点として指摘しておかなければならない。

また一方で、これは現在のブッシュ政権に限ったことではないが、アメリカの外交政治は、伝統的に理想主義(idealism)に根ざしているともよく言われる。この理想主義とは、アメリカに特有の価値観から世界を見下ろし、アメリカの理念や信念に従順な外部環境を作り上げようとする主張を意味する。そして、そうした主張を具現することに国家としての存在意義を置くことが、アメリカの伝統となってきたわけである。アメリカのこの伝統は、アメリカ至上主義論やアメリカ例外論を根拠にしている。それは、アメリカは他国のように墮落しておらず、倫理的、道徳的に優れているはずである。アメリカこそ他国が見習うべきモデルであるといった、独善的な自己正当化によって培われてきた。従って、理想主義もまた、先に指摘した新保守主義と並んで、もう一つの重要な点として注目しておくべき事柄である。

このように、アメリカ外交政治は、新保守主義と伝統的な理想主義を具現化するものである。そうだとすれば、次にわれわれが問うべきは、そうしたアメリカ固有の新保守主義や理想主義の源泉をどこに辿ることができるのか。さらにその源泉から湧き出すイデオロギーはいかなるものであるのかという問題である。そこで、解明の糸口として、現ブッシュ政権の拠り所と目されるレーガニズム(Reaganism)から議論することにする。

レーガニズムの正体

第2次世界大戦(the World War II, 1939-45)が終わるとともに始まった米ソの冷戦(the Cold War)は、1970年代末期には、旧ソ連のアフガニスタン侵攻を契機に急速に悪化していく。そして、いわゆるデタント(detent)の終焉を境に、新冷戦(the New Cold War)という新しい米ソ関係が生まれることになる。その緊張が高まる中、ロナルド・レーガンは1981年にアメリカ合衆国大統領として登場してくる。共和党(the Republican)のレーガンに先立って政権を握っていたのは、人権外交をモットーとしていた民主党(the Democrat)のジミー・カーター(James Earl Carter, Jr., 1924-)だった。他方、レーガンは、カーターとは対照的に、最も強硬かつ道義的な反ソ連、反共産主義の立場を鮮明に打ち出していた。そのレーガンがカーターを破って政権を樹立できた背景には、カーター政権時代に起こった1979年のイラン革命(the Iranian Revolution)が大きな契機としてある。この革命は、アヤトラ・ホメイニ(Ayatollah Ruhollah Mussau Khomeini, c. 1900-89)を指導者とするイスラム教シーア派(the Shias)の反体制勢力が、親米派のパフラヴィー朝(the Pahlavi dynasty)に代わって政権を奪取した政治的変動である。そして、アメリカの保守派にとっては、その結末は、カーター政権におけるアメリカ中東政策の破綻を象徴する出来事だった。また、革命の渦中に起こったテヘランでのアメリカ大使館員人質事件と、その救出に失敗したことも、カーター政権への失望に繋がっていった。そんな状況下、反ソ連、反共産主義を公言するレーガンに多くの注目と期待が集まった結果が、1981年のレーガン政権の誕生だったわけである。

レーガンが採った政治方針は、レーガニズムないしレーガノミックス(Reaganomics)と呼ばれるが、それは内政的には、大幅減税と積極的財政策により好景気をもたらした。一方、外政的には、カーター政権とは打って変わって世界各地で強硬策に出て、例えば、グレナダ侵攻という、ベトナム戦争(the Vietnam War, 1954-73)以来の本格的海外武力行使を行なうなど、強いアメリカを象徴する行動を展開していった。さらにレーガンは、旧ソ連を悪の帝国(evil empire)と非難し、米ソ関係を新たに和解不可能な対立と措定した上で、武力による平和維持をスローガンに旧ソ連と共産主義に対抗し、世界各地の反共主義運動を支援していったわけである。こうしたレーガニズムの直接的、間接的影響により、ベルリンの壁の崩壊(the collapse of the Berlin Wall, 1989)に象徴される東欧諸国の民主化と冷戦の終わりが、ようやく実現したのである。

ところで、レーガンは1981年から2期、8年間大統領職に留まったが、その在任期間中、就任演説や一般教書演説を皮切りに主要なものだけでも、優に90回を上回る公式演説をテレビやラジオを通じて行なった。それらの演説の中でも、とりわけ大統領職を離れる際に行なった1989年1月11日の最後の公

式演説、いわゆる「別れの演説」(“the Farewell Address to the Nation”)ほど、レーガンの政治理念を見事に語っているものはない。というのも、「別れの演説」は、レーガニズムの本質を知る上で、とても重要なヒントを与えてくれるからである。そこで、しばらくこの「別れの演説」に話題を移してみることにする。

レーガニズムとピューリタニズム

ロナルド・レーガンの「別れの演説」は、ホワイトハウスの大統領執務室からアメリカ合衆国国民に向けて語られた、最後の公式発言として様々な意味合いをもっている。この演説を概観すれば、まず初めに、大統領在任期間を振り返って、自らの政権が成し得た成果を再確認することから話が始まる。それから、その成果が、アメリカが建国以来培ってきた理念、すなわち自由(liberty)と平等(equality)、民主主義(democracy)の維持と発展においていかに意義深いものであったか、改めて国民の認識を促すよう語られていく。そして、アメリカが進むべき未来への指針を示してくれるものとして、自国の歴史と市民的伝統への回帰を訴えながら、演説は締め括られる。その締め括りに際して、レーガンは次のような回想のシーンを差し挟む。

The past few days when I've been at that window upstairs, I've thought a bit of the “shining city upon a hill.” The phrase comes from John Winthrop, who wrote it to describe the America he imagined. What he imagined was important because he was an early Pilgrim, an early freedom man. He journeyed here on what today we'd call a little wooden boat; and like the other Pilgrims, he was looking for a home that would be free. ⁽²⁾

このくだりは、レーガニズムの本質に横たわるイデオロギーとの関連で、極めて示唆的である。なぜならば、ここではレーガンは「光り輝く丘の上の町」(“shining city upon a hill”)と表現しているが、「丘の上の町」(“city upon a hill”)というフレーズをアメリカ史に残したそもそもの人物がジョン・ウインスロップ(John Winthrop, 1588-1649)であり、そのフレーズとウインスロップの名がここに言及されているからである。ウインスロップとは、アメリカ植民地時代を代表するピューリタン(Puritan)の政治家で、「丘の上の町」とは、ウインスロップが行なった著名な演説、「キリスト教徒の慈愛のひな型」(“A Model of Christian Charity,” 1630)に出てくるキーワードに他ならない。この連想を伏線にして、レーガンは「別れの演説」を現代版「キリスト教徒の慈愛のひな型」に定位しようと試みているのである。そして、さらにレーガンはこう述懐する。

I've spoken of the shining city all my political life, but I don't know if I ever quite communicated what I saw when I said. But in my mind it was a tall, proud city built on rocks stronger than oceans, wind-swept, God-blessed, and teeming with people of all kinds living in harmony and peace; . . . ⁽³⁾

ここで、レーガンは、自分の政治家としての使命は、この「光り輝く丘の上の町」について語ることであり、「光り輝く丘の上の町」の実現を目指していくことだったと告白している。また、「光り輝く丘の上の町」の具体的ヴィジョンとは、「調和と平和」(“harmony and peace”)に生きる人々で満ち溢れる、強固な基盤に立った「誇り高き町」(“a tall, proud city”)だとも語っている。では、一体、レーガンが依拠したウインスロップとはいかなる人物なのか、そして、演説「キリスト教徒の慈愛のひな型」はどんなメッセージを伝えているのか。次にこれらの問いに答えていくことにする。

ジョン・ウインスロップとは何者か

まず考察の入口として、アメリカ合衆国の前史、いわゆる植民地時代の歴史を少しお浸ししてみよう。既知のように、合衆国は、独立戦争(the American Revolution, 1776-83)を経て、1783年のパリ条約(the Treaty of Paris)によって正式にイギリスから独立を果たした。最初に合衆国を構成した州は、大西洋沿岸に連なっていた13のイギリス植民地だった。そして、中でも、現在のマサチューセッツ州の原型であったマサチューセッツ湾植民地(the Massachusetts Bay Colony)は、北米大陸北東部、すなわちニューイングランドにあるイギリス植民地の中心として、肝要な位置を占めていた。もっとも、ニューイングランドへのイギリス人の入植の結果できた最初の植民地は、プリマス植民地(the Plymouth Colony)と呼ばれる、農業を基盤とする小さな共同体だった。その担い手は、1620年に、かの有名なメイフラワー号(the Mayflower)に乗ってやってきた、例のピューリタンの巡礼父祖(the Pilgrim Fathers)だった。そして、この巡礼父祖の指導者がウィリアム・ブラッドフォード(William Bradford, 1590-1657)だった。

1620年当時のイギリスには、宗教改革(the Reformation)の流れを継承し、英国国教会(the Church of England)をより純粋なキリスト教会に変えようと運動していたグループがいた。そのグループがピューリタンと綽名されていたのだが、彼らが主張するキリスト教改革派思想、いわゆるピューリタニズム(Puritanism)は、非常に斬新で過激なものだった。その過激さから、ピューリタンはイギリスでの国家的宗教弾圧の対象になってしまったわけである。従って、イギリス国内に留まるためには、ピューリタンは、信条であるピューリタニズムを放棄することを余儀なくされ、放棄しない場合は徹底的な迫害が彼らを待っていた。この危機的状況の中で、イギリス国内での改革運動を諦め、国外に新たな活路を見いだそうとする者たちがピューリタンの中から現われるようになった。そして、巡礼父祖も、そうした国外移住を決意したピューリタンの一グループだったわけである。

他方、ブラッドフォードを指導者とする巡礼父祖の移住に遅れること10年。一説には500人とも600人とも言われている別のピューリタンのグループが、アーベラ号(the Arbella)を先頭に他3隻の船に乗ってイギリスのヤーマス港を出港する。彼らが目指した場所は現在のマサチューセッツ州の州都ボストンで、そこに自らの理想に基づくキリスト教会と自治共同体を打ち立てようとい目論んでいたのだった。出港後、約3ヶ月にわたる大西洋の航海を経て、1630年6月12日、彼らは記念すべき第一歩をボストン近郊に印すことになる。この一団の主導者で、大移住を指揮した人物が、ジョン・ウインスロップだった。そして、このウインスロップこそ、ロナルド・レーガン元大統領が「別れの演説」で引き合

いに出したジョン・ウインスロップその人なのだ。

ウインスロップが率いるピューリタンは、ボストン近郊に上陸すると、直ちにマサチューセッツ湾植民地の政府を組織する。そして、ウインスロップは、この植民地の初代総督(governor)に選ばれることになるのである。彼は、以後も総督に12回、副総督(deputy-governor)に3回選出され、その影響力は、後継の植民地総督のモデルとして仰ぎ見られるほど、絶大なものだった。⁽⁴⁾その好例を提供している人物に、植民地時代のニューイングランドにおける代表的神学者、コットン・マザー(Cotton Mather, 1664-1728)がいる。

マザーは、『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』(*Magnalia Christi Americana; or, The Ecclesiastical History of New England*, 1702)と題する著書、別名『ニューイングランド教会史』としても知られているその大著の中で、誰もが記憶すべき偉大な人物としてウインスロップを取り上げ、彼の政治家としての功績を讃えている。⁽⁵⁾その際に、マザーは、「ネヘマイアス・アメリカヌス」(“Nehemias Americanus”)⁽⁶⁾というラテン語の称号をウインスロップに与えている。この称号は、ウインスロップの政治家としての真価に関するマザーの認識の表明でもある。

ラテン語の「ネヘマイアス・アメリカヌス」とは、英語に言い換えればアメリカン・ネヘミヤ(American Nehemiah)という意味で、ここでのネヘミヤとは、旧約聖書(the Old Testament)はネヘミヤ記(The Book of Nehemiah)の主人公である、ハカリヤの子ネヘミヤ(Nehemiah)を指している。ネヘミヤ記によれば、ネヘミヤは優れた政治的、軍事的指導者で、周囲の敵の妨害を乗り越えてエルサレムの城壁を修復したとされている。このことを勘案するならば、マザーがウインスロップを「ネヘマイアス・アメリカヌス」と呼ぶ意図は明らかである。つまり、マザーは、ウインスロップを、ニューイングランドにエルサレムの城壁のような堅牢な砦を新たに築いた、ネヘミヤさながらの偉大な政治家だと評価しているのである。⁽⁷⁾

マザーのこの評価を証拠立てるかのように、ウインスロップは、マサチューセッツ湾植民地の総督系譜学の源として、現代に至るまでその揺るぎない地位を占めてきたのである。そして、そのウインスロップが、1630年6月12日のボストン近郊への上陸を目前に、ピューリタンの同朋に向けて行なった演説が「キリスト教徒の慈愛のひな型」であり、レーガンが引き合いに出したフレーズ、「丘の上の町」の引用元なのである。そこで、この「丘の上の町」が、「キリスト教徒の慈愛のひな型」ではどのようなコンテキストにおいて語られ、どんな意味合いを象徴する言葉として用いられているのか、詳しく検討してみることにする。

象徴としての「丘の上の町」

ジョン・ウインスロップの「キリスト教徒の慈愛のひな型」は、マサチューセッツ湾植民地のヴィジョンをピューリタン同朋に言い論じた、殊の外重要な演説である。それは、要約すれば、4つの主張を柱にしていると言うことができる⁽⁸⁾。その第1は、ニューイングランドへの移住が神の意図にかなった正当な行為であるということ。第2は、ニューイングランドに神の摂理(Providence)が啓示される究極のキリスト教会を建てるのが彼らの使命(errand)であるということ。第3は、ニューイングランドが来

るべき千年王国(the millennium)とキリストの再臨(the Second Coming)の舞台であるということ。⁹⁾そして、第4は、マサチューセッツ湾植民地こそ、神の約束の地(the Promised Land)、ニューイングランドの中心となる自治共同体であるということである。こうした4点を再確認させる狙いで「キリスト教徒の慈愛のひな型」は語られているが、その冒頭、ウインスロップは、神の手による人間類型について次のように述べている。

God Almightye in his most holy and wise providence hath soe disposed of the condicion of mankinde, as in all times some must be rich some poore, some highe and eminent in power and dignitie; others meane and in subieccion. ⁽¹⁰⁾

ウインスロップの説明では、人間は、神の業により、富める者あるいは強い者と、貧しい者あるいは弱い者という二つの範疇に分けて創造されているという。この人間の類型化は、富める者と貧しい者にそれぞれ義務を負わせ、強い者と弱い者におのおのの役割を与えるための、神の作為として捉えられている。つまり、人間の義務と役割は決して恣意的なものではなく、神の摂理を前提にして定義されるということである。神の摂理とは、あらゆるものを超えた絶対的権威であり、ピューリタンの認識論における唯一の規範なのである。ウインスロップは、この認識論に基づいて、人間の義務と役割を続けて説明していく。

... to hold conformity with the rest of his workes, being delighted to shewe forthe the glory of his wisdom in the variety and differance of the Creatures and the glory of his power, in ordering all these differences for the preservacion and the good of the whole, ... (pp. 282-83)

ここでの主張は、次のように解釈することができる。すなわち、この世の出来事はすべてからく神によって企てられているのだから、被造物(creature)は何であれ、神の全知全能と至高を例証する神の道具(God's instrument)としてのみ存在しなければならない。だからこそ、富める者であれ貧しい者であれ、あるいは強い者であれ弱い者であれ、それぞれの人間が担う義務と役割は神から与えられる使命と見做されるのである。この世とは神の摂理が解き明かされる舞台であり、人間は神の摂理をその舞台で開示するための神の道具である以上、仮に人間が義務や役割から逸脱することがあれば、その逸脱は、そもそも神への背反を意味することになるわけである。ウインスロップの主張には、人間の固有性は、その存在の直接性ではなく媒介性において定義され、認識されるべきものだとする大前提がある。そして、ウインスロップは、人間の固有性を、公共性へと収斂する枠組みの中に肯定的に位置づけていく。そのレトリックはこうだ。

... first, vpon the wicked in moderateing and restraining them: soe that the riche and mighty should not eate vpp the poore, nor the poore, and dispised rise vpp against their superiours, and shake off their yoke; 2ly in the regenerate in exercising his graces in them, as in the greate ones, their loue mercy, gentleness, temperance etc., in the poore and inferiour sorte,

theire faithe patience, obedience etc: (p. 283)

公共性という脈絡において人間個々の固有性が定義される時、富める者や強い者は貧しい者や弱い者を勞り、貧しい者や弱い者は富める者や強い者に従順になる。また、悔い改めて神の恩恵(Grace)に与っている者、すなわち回心(conversion)を経た者には、愛と慈悲、平静、克己心が募っていき、回心を知らない者は、信仰(faith)と堅忍不拔、恭順といった精神に目覚めるようになる。そして、誰もが慈しみの絆で固く結ばれるようになるという。ウインスロップは、神が企図した道筋を分かり易く説いているのである。

このように、人間の側から見れば不平等であっても、それが神の業であればこそ、不平等に不当性が問われることはそもそもない。だから、富める者が富める者であり続けるために財を築き、貧しい者が富める者の施しに甘んじ続けることも、また、強い者が弱い者を勞り、弱い者が強い者につき従うことも、神の道具としての人間に神が命じた掟と理解されるのだ。ここに、神の摂理のパラドックスがある。ウインスロップは、神から与えられる掟をさらに逆説的に敷衍している。

... it appeares plainely that noe man is made more honourable then another or more wealthy etc., out of any perticuler and singuler respect to himselfe but for his Creator and the Common good of the Creature, Man; ... There are two rules whereby wee are to walke one towards another: JUSTICE and MERCY. (p. 283)

この説明に拠れば、富める者と貧しい者、あるいは強い者と弱い者を繋ぐ絆は、「公正と憐れみ」(“JUSTICE and MERCY”)の精神であるとされている。そして、この「公正と憐れみ」の精神をモットーに規律正しく生きることこそ、ピューリタンが築こうとしている自治共同体に安寧秩序を与えるものであり、それが神への賛美と人間の幸福に至る道だと明示されている。

繰り返しになるが、ウインスロップは、人間が互いの弱さや哀しみ、災いを共有できるのも、互いを護り、慰め、励ますことができるのも、「公正と憐れみ」の精神があつてのことだと力説している。そして、その典型例がイエス・キリスト(Jesus Christ)によって体現されていることを、ウインスロップは指摘する。

For patterns wee haue that first of our Saviour ... found such a natiue sensiblenes of our infirmities and sorrowes as hee willingly yielded himselfe to death to ease the infirmities of the rest of his body and soe heale there sorrowes: ... (p. 289)

キリスト教における大前提では、アダム(Adam)の原罪(the original sin)のために根源的罪を背負う人間は、キリストの十字架による贖罪(atonement)への信仰なくして、神の命令を遂行し掟を守る能力を回復することはなく、悔い改めてキリストの贖罪による「公正と憐れみ」の精神を受け入れることなしに、人間が自己愛だけに生きる否定的存在から脱却することはないとされるのである。つまり、回心による再生とは、聖霊(the Holy Ghost)の働きによって神から与えられる救済(salvation)の約束

であり、救済に与る神の民(God's people)となった人間、つまり聖徒(saint)にしか、キリストが体現した「公正と憐れみ」の精神を実践することはできないということなのだ。ウインスロップにとっての「丘の上の町」とは、この聖徒によってのみ構成される都でなければならないと規定されているのである。

For the persons, wee are a Company professing our selues fellow members of Christ, . . . we ought to account our selues knitt together by this bond of loue, and liue in the exercise of it, if wee would haue comforte of our being in Christ, . . . (p. 292)

聖徒だけが集う、「公正と憐れみ」の精神に満ち溢れた楽園(the paradise)。それがマサチューセッツ湾植民地のヴィジョンだとすれば、そのヴィジョンの具体的青写真とはどのようなものなのか。ウインスロップは明確にそれを提示している。

. . . for the worke we haue in hand, it is by a mutuall consent through a speciall overruling providence, and a more then an ordinary approbation of the Churches of Christ to seeke out a place of Cohabitation and Cnsorteshipp vnder a due forme of Government both ciuill and ecclesiastical. . . The end is to improue our liues to doe more seruice to the Lord the comforte and encrease of the body of christe whereof wee are members that our selues and posterity may be the better preserued from the Common corrupcions of this euill world to serue the Lord and worke out our Salvacion vnder the power and purity of his holy Ordinances. (p. 293)

ここでは、マサチューセッツ湾植民地とは、移住者相互の同意に基づいた、共生し親交を深めるための自治共同体だとまず定義されている。また、共生とは一致して神に奉仕することであり、親交とはキリストにおける慰めを共有することだと説明されている。そして、共生と親交の中で自分自身や子孫を墮落から守り、純粋な教会において神の救済が得られるよう努力することが、ピューリタンの自治共同体の繁栄を保証していく鍵になると断言されている。

こうして具体的青写真を語り終えた後、ウインスロップは、いよいよマサチューセッツ湾植民地を「丘の上の町」に喩え、演説を締め括っていく。ここで初めて、ロナルド・レーガンが倣った「丘の上の町」というフレーズが使われるのである。

. . . we shall finde that God of Israell is among vs, when tenn of vs shall be able to resist a thousand of our enemies, when hee shall make vs a prayse and glory, that men shall say of succeeding plantacions: the lord make it like that of New England: for we must Consider that wee shall be as a Citty vpon a Hill, the eies of all people are vpon vs: . . . (pp. 294-95)

「丘の上の町」(“a Citty vpon a Hill”)は、実はウインスロップが作り出した造語ではない。そもそも、それは、新約聖書(the New Testament)のマタイによる福音書(The Gospel according to St. Matthew)

第5章第14節から引用されたものである。この聖句は、イエスが弟子たちと群衆に向かって語った、あの有名な山上の説教(the Sermon of the Mount)の一節である。その意味するところは、この山上に集った者たちこそ、この世における道標であるということである。そして、ウインスロップは、マタイによる福音書に記された「丘の上の町」を聞き手に連想させ、同じこの世における道標というコンテキストに聞き手を誘った上で、マサチューセッツ湾植民地こそキリスト教を基盤とする自治共同体のモデル、あらゆる人々の目が注がれる「丘の上の町」とならなければならないと結んだわけである。この「丘の上の町」は、壮麗なイメージを聞き手に抱かせる、実に魅惑的なフレーズである。そうであれば、「丘の上の町」が預言的な響きを帯びてくるのも当然で、それこそがウインスロップの企みなのである。その証拠に、上陸後、大西洋の航海しながらニューイングランドの荒野(the wilderness)を彷徨い歩いていくピューリタンにとって、「丘の上の町」は、アイデンティティと使命を絶えず彼らに想起させる標語として、以後も着実に機能していくことになるのだ。そして、長い時を隔てた現代でも、例えばレーガンの「別れの演説」に見られる「光り輝く丘の上の町」のように、その象徴的役割を相変わらず担っている。

おわりに

本論考をとおして明らかになったのは、ジョン・ウインスロップの「キリスト教徒の慈愛のひな型」では、「丘の上の町」というフレーズはこの世における道標というコンテキストにおいて語られ、キリスト教を基盤とした自治共同体のモデルを象徴する標語として用いられていること。そして、ロナルド・レーガンの「別れの演説」においては、レーガンが「光り輝く丘の上の町」の具体的ヴィジョンを、「調和と平和」に生きる人々で満ち溢れる、強固な基盤に立った「誇り高き町」だと言う時、そこには、ウインスロップが用いた「丘の上の町」によって連想される、キリスト教を基盤とした自治共同体のモデルがコンテキストとして措定されていること。それを伏線に、レーガンは、アメリカ合衆国こそ、あらゆる人々の目が向けられる理想国家でなければならないとする、独特のイデオロギーを象徴的に語っているということである。結局、アメリカ至上主義論やアメリカ例外論を本拠とするレーガニズムの本質に横たわるイデオロギーも、植民地時代から育まれてきたピューリタニズムに由来する、極めてキリスト教色の強い新保守主義、理想主義に他ならないことが実証されたわけである。そうであればこそ、ジョージ・ブッシュ大統領の、「純化されたレーガニズム」、「レーガニズムの焼き直し」とさえ言われる外交政策を特徴づける善悪二元論も、伝統的なピューリタンのレトリックの正に変奏(variation)であることが判明するのである。テロの側につくかアメリカにつくかという二者択一で世界を裁こうとする姿勢も、その起源は、腐敗したローマ・カトリック(Roman Catholicism)の世界に留まるのか、神によって約束された新大陸を選ぶのかという、ピューリタンの二元論に実はある。

現代アメリカ人の多くは、不正な国家を前に、アメリカ合衆国は正義を代表する存在であると無条件に前提し、正義を体現するアメリカの究極的勝利が神の摂理によって予定されていることを信じて止まない。その確信に深く潜むのは、ピューリタニズムの伝統的な世界観や人間観をアメリカ神話(the Myth of America)の源泉としてしまう、無意識のナショナル・コンセンサスである。本論考は、正し

くこの無意識のナショナル・コンセンサスこそ、アメリカの歴史に絶えず潜在してきた神話的水脈なのだとは結論するものである。それゆえに、プッシュ政権やネオコンの、新保守主義や理想主義に根差す外交政策も、この無意識のナショナル・コンセンサスの顕在化という、アメリカ神話の文脈における一例としてまず理解されるべきなのである。

注

- (1) 古矢旬『アメリカ——過去と現在の間』(東京、岩波書店、2006)、p. 176。
- (2) <http://www.reagan.utexas.edu/archives/speeches/1989/011189i.htm>
- (3) <http://www.reagan.utexas.edu/archives/speeches/1989/011189i.htm>
- (4) ジョン・ウインスロップの政治理念やその手法については、別に詳しい論述がある。拙論「神の道具の系譜学——Governorとしてジョン・ウインスロップ」、『アメリカ文学評論』19(筑波大学アメリカ文学会、2004)、pp. 71-82を参照のこと。
- (5) マザーの『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』は、1702年にロンドンで最初に出版された。しかし、その後も長い間、アメリカで出版されることはなかった。そして、1820年になって、コネティカット州ハートフォードにあるSilas Andrusから、ようやくアメリカでの初版が出版されることになった。現在では、次に挙げる復刻版を利用することができる。Cotton Mather, *Magnalia Christi Americana: or The Ecclesiastical History of New England*, 2 vols. (Hartford, CT: Silas Andrus and Son, 1820; Carlisle, PA: The Banner of Truth and Trust, 1979).
- (6) Cotton Mather, *Magnalia Christi Americana: or The Ecclesiastical History of New England Vol. 1* (Hartford, CT: Silas Andrus and Son, 1820; Carlisle, PA: The Banner of Truth and Trust, 1979), p. 118.
- (7) この点での考察は、拙論「ニューイングランドの予型論的表象——コットン／ウインスロップと「丘の上の町」」、『アメリカ文学評論』18(筑波大学アメリカ文学会、2002)、pp. 2-3にもあるので、そちらを参照のこと。
- (8) 「キリスト教徒の慈愛のひな型」に関する論としては、「ニューイングランドの予型論的表象——コットン／ウインスロップと「丘の上の町」」、pp. 8-13がある。なお、本論考においては、テーマとの関連で、同論文と内容の重複があることを予め断っておく。
- (9) ニューイングランド・ピューリタニズムにおける終末論の問題への取り組みは、ヨハネの黙示録第12章の“the woman”の荒野への逃避、同第20章の千年王国とキリストの再臨などをめぐるピューリタンの解釈を、精緻に議論することから始めなければならない。それは別の機会に譲るとし、ここでは敢えて触れない。なお、拙論“Farewell to Typological Laodicea: Thomas Hooker’s Mapping of the Kingdom of Christ in *The Danger of Desertion*,” *Review of American Literature Vol. 20* (Tsukuba American Literary Society, 2007), pp. 31-45は、その一部を論じたもので、最も詳しい論考としては、Avihu Zakai, *Exile and Kingdom: History and Apocalypse in the Puritan Migration to America* (New York: Cambridge UP, 1992)がある。

- (10) John Winthrop, "A Model of Christian Charity," Stewart Mitchell ed. *Winthrop Papers Vol. II: 1623-1630* (Boston: The Massachusetts Historical Society, 1931; New York: Russell & Russell, 1968), p. 282.以後、同書からの引用は、括弧内にページ数のみを記すこととする。なお、同書のテキストは、現代語綴りではなく、1630年当時の綴りのままである点を付言しておく。

付記

本論考は、2007年度実践女子大学海外研修(於ダートマス大学)における研究成果を踏まえ、2008年7月25日に行なった実践女子学園TV講座における講演の原稿に、大幅な改稿を加えたものである。なお、ダートマス大学バイカー記念図書館から貴重な研究資料を提供していただいたことも併せて記しておく。